



## マルクス主義社会学序論(2)：社会と人間の基礎理論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 中江, 好男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00002304">https://doi.org/10.32150/00002304</a>

## マルクス主義社会学序論 (2)

### —— 社会と人間の基礎理論 ——

中 江 好 男

#### 目 次

- 1 社会学の課題と方法の問題
- 2 ブルジョア社会学批判
- 3 マルクス主義社会学の基礎理論

## 2 ブルジョア社会学批判

われわれはこれまでに、コントとジンメルに代表させたブルジョア社会学の古典的理論に対してイデオロギー論的分析をおこない、そこにおける理論的・実践的な諸問題の基本的性格を明らかにしてきた<sup>(1)</sup>。次には当然、その現代的理論すなわち資本主義の独占的・帝国主義的段階におけるブルジョア・イデオロギーが問題になってくる。

しかし、現代社会学におけるブルジョア・イデオロクというとき、それはまさに百家争鳴の様相を呈しているといえる。したがって、ここでは大胆にそれを次の二人によって代表させることにしたい。すなわちその一人は、「二十世紀最大の社会学者であると同時に、現代の運命を強烈に体験して現代人に一つの生き方を啓示しえた大思想家<sup>(2)</sup>」という一般的評価をもつM・ウェーバー(1864-1920)である。そしてもう一人は、今世紀中葉における「世界の理論社会学を文字どおり背負って立つ第一級の理論家<sup>(3)</sup>」と評されているT・パーソンズ(1902-)である。ここでは可能な限り、この両者の社会科学および社会学理論の中心的なカテゴリーや主要概念に限って、それらにたいする批判的分析をこころみ、現代ブルジョア社会学における観念的体制維持的性格を示しだしていきたい。

まずはウェーバー理論の基本的な性格や本質についてであるが、その浮彫のためにはやはり、彼が生きた時代背景を無視するわけにはいかないであろう。したがって、それをまず簡単に素描すると、国際的には、ウェーバーのいうとおり、先進資本主義「諸国間の政治・経済政策上の闘争が世界制覇をめざして激化の一途をたどる現代<sup>(4)</sup>」ということであり、そのなかでウェーバーの母国たる新興ドイツ資本主義もまた、所謂ビスマルク体制による強力な資本家保護政策のもとで、独占段階・帝国主義段階へとむけて急迫的に発展していったわけである。ドイツ資本主義のこうした発展がドイツ国内の労働者階級や勤労人民とのあいだにさまざまな階級矛盾や社会矛盾を尖鋭化していったこと、この現実を土台にして、早くも1863年には全ドイツ労働者協会が創立され、これがマルクス主義者のリープクネヒトやベーベルの指導のもとに1869年には、ドイツ社会民主労働党へと発展し、更に1875年のゴータ大会を契機にして、ドイツ社会主義労働党へと発展し、そして、これが1890年の選挙によってドイツ議会のなかに大進出していったことは、周知の事実である。そればかりで

はない。1891年、この大勝利をふまえて開催されたエルフルト大会において、社会主義労働党は、社会民主党とその名をあらためたのであるが、これが1910年代までの期間、ヨーロッパ最大の指導的な社会主義政党にまで発展していったのである。

以上がウェーバーの全生涯を直接間接に規定した時代背景である。そして、こうした時代の子として、しかもドイツ・ブルジョアジーの子として成長し、「現代の運命を強烈に」生きていった彼がその立場から、当時のドイツ労働者政党のこのような成長と発展を導びいていった指導理論、つまりはマルクス主義の全体系にたいして、それとどのように対抗し、それを如何に克服していくかという理論的課題を終生のものとしたことは少しも不思議ではない。「マックス・ウェーバーはカール・マルクスの影法師と長いあいだ激しく対話するなかで社会学者になっていった<sup>(5)</sup>」というA・サロモンの指摘は、まさにこのことを意味しているといえる。

1904年の「社会科学および社会政策的認識の『客観性』」は、こうした課題解決をめざした長年の努力の成果の一つであるが、そこでの主要な結論は、要するに次のことなのである。すなわち「近代の経済的変革……や、とりわけ労働問題の圧倒的な重大性が強い印象を人びとにあたえた結果……各種の認識……の道に滑りこんだ」、「『世界観』としての、あるいは歴史的现实を因果的に説明する公分母としての、いわゆる『唯物史観』は、きっぱりと拒否されなければならない<sup>(6)</sup>」という断定である。この断定の合理化のために、すぐあとにみるように、ウェーバーはさまざまな主観的論理を組立てているのであるが、いずれにしてもここにこそ、前述のような時代背景をブルジョア的に反映したところの、ウェーバー理論の本質が端的にあらわれているのである。

なおこれについて直接に係わる問題の一つをあげれば、認識論上のあらゆる観念論者の場合と同様に、ウェーバーもまた「諸科学の研究領域の基礎にあるのは、『物』（経済的・階級的な諸関係、筆者）の事物的な連関ではなくて、さまざまな問題の思想上の連関である<sup>(7)</sup>」という断定に立っているのであるが、こうした観点からの否定的な対極理論として唯物史観または史的唯物論を一面的にしか理解していないという問題である。すなわち、それは「歴史の経済的解釈……つまり現実の経済的解釈<sup>(8)</sup>」であるという断定である。サロモンがいう「マルクスの影法師」とは、史的唯物論についてのウェーバーのこうした理解を指しているのかどうかについては明らかではない。しかし、のちに詳しくみるように、マルクス主義の歴史・社会理論がこうした経済的唯物論でないことだけは明らかなことである。しかしここでは、マルクス主義についてのこうした一面的理解もまた、それを「きっぱりと拒否」することの大きな口実にされていることのみを指摘しておきたい。

さて、ウェーバーの社会科学理論における価値判断排除の主張、科学的認識の「客観性」を守るという理由のもとでの所謂没価値性論は、いうまでもなく、彼の方法論上の基本的なカテゴリーの一つである。いまこれを彼自身の言葉でいいかえれば、「実践のための処方箋をひきだすことができるような、拘束力をもった規範や理想をみつけ出すことは、けっして経験科学の課題ではありえない<sup>(9)</sup>」という主張であり、そのために科学的な認識作用から理想や人生観・世界観といった価値判断を排除せよという主張である。これが理論と実践との弁証法的統一というマルクス主義の命題や、あるいは、社会学的認識の基本的課題として頭書に述べたようなわれわれの問題意識にたいして、真向から対立する主張であることはいうまでもない。

しかしながら、ウェーバーのこの主張について、ここで一言しておくべきことは、これとそれ以後に横行しているさまざまな形での所謂似非没価値性論とを混同してはならないということである。何故ならウェーバー自身、次のように強調することによって、こうした「重大な自己欺瞞」とのあいだに、明確な一線を引いているからである。すなわち、「中道派は左右両極の党派理念とくらべて、こればかりも科学的な真理をもつわけでない」と強調し、または「自分の立場をはっきりさせな

いことと科学的な『客観性』とのあいだには、内面的になんの縁もゆかりもありはしない<sup>(10)</sup>と強調することによってである。

それではいったい、この主張は如何なる論理によって展開されているのか。それをまず、認識主体についてみれば、ウェーバー自身一度は、それが普通の事態であると認めざるをえなかった、「生きた人間<sup>(11)</sup>」——これを幾らか突きつめていかえれば、理論と実践との統一体としての現実的な認識主体と解されるのであるが——を、そのままに認めつづけたものでないことはいうまでもない。そうではなくてウェーバーは、この主体における理論と実践との「毛筋ほどしかない微妙な線を際立たせ」ることによって、ともに抽象化された次の二つの人間像を論理的に組立てていくのである。すなわち、その一つは、特定の理想や世界観といった個々の「信仰の問題<sup>(13)</sup>」のみにたずさわり、それにもとずいて特定の政治的・社会的な実践をなすところの「意欲する人間」である。そしてもう一つは、これに反して、そうした問題にたいしては厳しく排除的な態度をとり、この意味において「客観的」な認識のみに、いわば機械的・技術的にたずさわっている「考える研究者<sup>(14)</sup>」である。そして、いうまでもなく、この後者のみによって科学的認識の「客観性」が保障されるのだというのである。

以上が、認識主体の問題からみたウェーバーの主張内容の概略である。しかし、一見もっともにみえるこの主張の一つの問題は、彼が理想や世界観というものを個々に自由な「信仰の問題」として非合理主義的・直観主義的に理解している点である。しかし実際にはそうしたものでは決してないのである。たとえば、今日の労働者階級や勤労国民大衆における物質的・精神的な貧困からの解放要求とこの要求実現のための「万国の労働者団結せよ！」という命題とは、確かに一つの理想や世界観にほかならない。しかし、まずこの解放要求についていうならば、それが労働者個々の恣意や直観によるものでは決してなく、資本主義的な生産関係のなかで彼らがおかれている経済的・階級的な諸条件、「現存の階級的諸矛盾」の必然的な反映としての「階級の要求」(レーニン)であるだろう。またこの要求の実現、つまりは社会的実践の諸問題についても、それらを厳密に「事実によって検証し、事実還元」していくという、不断の科学的作業がなければ、「理想は、大衆によって取りあげらるべき、したがってまた実現さるべき、いかなる機会もなしに、単なる無邪気な願望におわってしまうだろう<sup>(15)</sup>」ことも、今日ではすでに幾多の事実が示しているとおりである。

ウェーバーの没価値性論について、ここでわれわれの結論の一つをいえば、要するにそこには、こうした点についての理解がなかったがために、その当然の帰結として「創造と無関係な認識とか、認識と無縁な創造<sup>(16)</sup>」といった、非本質的・非現実的な人間理解に落ち入らざるをえなかったということである。

なお、因にいえば、「価値判断からの自由」というこの主張が、当時の世界市場争奪戦のなかでのドイツ独占資本の階級的な要求すなわち労働者政党の大量国会進出の成果たる教育や医療その他の社会保障の国費支弁といった、「社会政策的失費からの自由」という経済的要求の間接的代弁であったことは、多くの経済思想史家によって、すでに立証されているところである<sup>(17)</sup>。

しかしながら、ウェーバーによるこの主張は、みえてきたような認識主体の問題のみに止まっていはいない。むしろその前提には認識対象の問題、つまりは歴史的社会的現実についての彼の主観的論理が存しているのである。したがって次には、彼のいう「現実科学」の理解対象たる「現実」なるものについて、一般的にみることから始めたい。

しかしそのまえに、われわれの立場からの歴史的社會とは何であるのか。それを一言でいえば、「経済的社會構成体」(マルクス)ということである。具体的にはのちにみていくが、要するにマルクスは、この概念をあらゆる社会関係のうちから、それぞれの時代における生産関係を、人間の意

識や意志から独立した客観的な生産関係を、それ以外のあらゆる社会関係の究極的な土台として取り出すことによって作りあげたのである。そしてこれによって初めて、社会は「客観的な規準」(レーニン)、客観的な社会法則・歴史法則をもつところの客観的存在としてとらえられ、それを対象とする「科学的社会学の可能性をつくりだした<sup>(18)</sup>」のである。

ウェーバーの「現実」規定が、これに真向から対立したものであることはいうまでもない。すなわち彼はいう。「ある一つの個別的なできごとを規定している原因の数と種類は文字どおりいつも無限であり、その一部だけを観察すべきものとして選り分ける標識は、そのできごと自体のうちにはけっして存在しない<sup>(19)</sup>」と。あるいは、それ自体は絶対にくみつぐことのできない多様性からなる「無意味な無限」であり「カオス」であると断定され、そこにおける認識や実践の「客観的な規準」、法則性の存在が否定されていくのである。人びとの実践を導く理想や世界観というものが、個々に自由な「信仰の問題」であり、したがって、そうした偶然的要素は不遍的な科学的研究からは排除されるべきだという前述の主張の前提には、客観的な現実についての、こうした思想が存していたわけである。いずれにしても客観的な生活現実そのもののなかに、実践と同時に認識を導く規準がないとすれば、それはそれ以外のもの、つまりは主観の側に求めざるをえなくなってくる。

この点についてより具体的に、われわれの立場での社会の究極的な土台であると同時に、その故に社会認識の究極的な基準でもある生産関係＝「物質的社会関係」(レーニン)を例にとり、ウェーバーの主張を確認すれば、それは次のとおりである。すなわち「ある現象が『社会—経済的』現象であるゆえんの性質は、その現象そのものに『客観的』に付着しているものではない。それはむしろ、われわれの認識関心の方向によって制約されており……問題になっている現象にわれわれが付与する特殊な文化意義から生れてくる<sup>(20)</sup>」というものである。ここでまず明らかなことの一つは、生産関係つまりは階級関係の客観的存在がきっぱりと否定されているということであり、したがって階級矛盾とその解決としての社会発展という客観的な歴史法則が否定されているということである。そしてもう一つは、そうした唯物論的社会把握に代って、個々の研究者の認識関心や文化意義といった価値理念つまり特殊な主観のみが絶対化され、「社会—経済的」現象もその産物にほかならないということである。主観主義的・唯心的社会把握以外のなにものでもないのである。

ところで、研究者が特殊の意志と能力をもった「文化人間」(ウェーバー)であれ何であれ、彼の「価値理念が『主観的』であることは疑問の余地がない<sup>(1)</sup>」。その彼における認識の「客観性」はどのようにして可能なのか。いうまでもなくその一つの方法は、前述のように没主体化された「考える研究者」の立場に徹することであり、もう一つの方法は、「客観的」な認識手段としての所謂「理念型」概念である。したがって、これはウェーバー理論のもう一つの基本的概念であるが、それはどのようなものであるのか。

みてきたようにウェーバーにとっては、対象的現実そのものは「無意味な無限」であり、混沌たる「カオス」であり、したがってそこは、認識を導く何等の「客観的な規準」もないものであった。そうしたなかで「考える研究者」は、いかにして「客観的」な認識を生みだしていくかという問題である。ウェーバーによれば、それは、研究者の「想像力<sup>ファンタジー</sup>によって、ありそうなこと〔adaguar〕と判断された<sup>(22)</sup>」ところの、現実のうちの特定の諸要素を統一して、「思惟」のうえて「純論理的」に「矛盾のない完成した世界を仕立てあげる<sup>(23)</sup>」ことによってである。理念型とは、こうした意味での「思想像」にほかならないのであり、したがってそれは、ウェーバーもいうとおり、あくまでも研究者による「思考のうえての構成物であって、歴史的にあった現実でもなければ、『本来の』現実であるわけでもない<sup>(24)</sup>」のである。その特徴といえば、「現実について経験された内容」、つまりは既成の諸現象のみについての「抽象的な」(ウェーバー)説明概念として、「純論理的な『完全性』<sup>(25)</sup>」

すなわち「客観性」のもとにおかれているというにすぎない。

ところで、当然のことながら、彼の一般理論におけるこうした主観主義的論理は、社会学理論のなかではより明確に「個人主義的方法<sup>(26)</sup>」として展開されていく。ここではそれを彼の「社会学の基礎概念」(1921-22年)を中心にしてできるだけ端的にみていきたい。

ウェーバーにおいては、確かな存在として存在しているものは、個々に存在している諸個人のみであった。したがって「経験諸科学」の一つとしての社会学は「個々人の行為」に着目せざるをえず、こうしてとりわけ「社会学とは、社会的行為を解明しつつ理解し、そうすることによって社会的行為の経過や結果を因果的に説明しようとするひとつの学問である<sup>(27)</sup>」と定義されるのである。そこでまず、問題になるのは諸個人とは何かという点であり、あるいは、これとの関連において諸個人の行為とは何かという問題である。これについてまず、われわれの立場から述べれば、それは次のものである。すなわち「諸個人といってもそれは自他の表象のなかに現われうるような諸個人のことでなく、現実に存在しているような諸個人、すなわち、はたらし、物質的に生産しているような諸個人、したがって特定の物質的な、そして彼らの意志からは独立な諸制限、諸前提および諸条件のもとで活動しているような諸個人のことである<sup>(28)</sup>」(傍点・筆者)。ウェーバーの個人概念したがって行為概念が、こうした「社会的諸関係の総体」としての把握に真向から対立するものであることはいままでもない。「『行為』というのは、単数または複数の行為者がその行動にある主観的な意味をむすびつけるとき、そのかぎりでの人間の行動のことであり<sup>(29)</sup>」という言葉が、そのことを端的に示しているといえる。すなわち、彼においては個人とは、そのうちに「内在する抽象物」(マルクス)たる「主観的な意味」つまり主観的な意図や動機の担い手として、直接的・観念的にのみ理解されており、「こうした動機の背後にさらにどのような推進力があるのか、どのような歴史的原因が行為する人間のなかであのような動機に変形するのか」といった、多くの場合、「隠れた諸法則に支配されている<sup>(30)</sup>」社会的存在としては、理解されていないということである。

そして、ウェーバーにおける社会的行為とは、それぞれにこうした主観的動機をもった「単数または複数の行為者」が、相互に行為をとりかわし合う過程をいうのであり、この相互行為結果からその「経過の仕方」や「意味連関」へとさかのぼって、追体験的に理解し、それを因果的に説明していくことのみが「理解社会学」の課題なのである。こうして、社会関係や社会集団または国家や社会体制についても、それらの客観的「実体的な把握」が避けられ、たとえば「国家にしても、意味的に方向づけられた一定種類の社会的行為が経過する見込みが消滅するやいなや、社会学的には『存在する』のをやめるのである<sup>(31)</sup>。」

以上、みてきたようにジンメルに引き続いてウェーバーもまた、主観的個人観や個人主義的社会観に立っている。これが両者に相共通する本質であるが、とはいえ、この二人のあいだには、もちろん幾つかの差異がある。たとえば、前者の社会概念が、すでにみたように「個人間の心的相互作用」といった、心理主義的に矮小化されたものであったのにたいして、ウェーバーはその非を鋭く批判し、「社会的行為の規定根拠」が、したがって社会が、次の四つの行為類型から構成されるとしている点である。すなわち、①目的合理的なもの、②価値合理的なもの、③感情的・情緒的なもの、④伝統的なものである<sup>(32)</sup>。精緻な形式論理と「抽象的な」理念型の駆使による、こうした四つの類型概念の設定によって、彼はジンメルの「末梢神経作用」的な社会概念を克服したのであるが、これが、帝国主義の初期段階と重なりあった、自信に満ちた「ドイツ資本主義最盛期の子<sup>(33)</sup>」というウェーバー評の一つの理由であるだろう。

注

- (1) 拙稿「マルクス主義社会学序論(1)」, 北海道教育大学紀要 26 の 1, 所収。
- (2) 高島・中村「マックス・ウェーバーの人と思想と学問」, 世界大思想 23, 河出書房, 446p. p.
- (3) 佐藤勉, 現代社会学大系 14 卷, パーソンズ「解説」, 青木書店, 547 P.
- (4) ウェーバー「社会学および社会政策的認識の『客観性』」, 現代社会学大系 15 卷, 青木書店, 26 P.
- (5) 本田喜代治「社会学史入門」, 培風館, 216 P より重引。
- (6) ウェーバー, 前掲書, 26 P.
- (7) 前掲書, 25 P.
- (8) 前掲書, 27 P.
- (9) 前掲書, 6 P.
- (10) 前掲書, 13 P-16 P.
- (11) 前掲書, 17 P.「社会科学の領域では, 科学的な問題の提出は, 経験上かならずとっていいほど, 実践的な『社会問題』によって刺戟をあたえられるのが普通である。したがって, ある科学的問題の存在をただみとめることだけでも, 生きた人間の, 特定の傾向をもった意欲と個人的にむすびついている。」
- (12) 前掲書, 75 P.
- (13) 前掲書, 10 P.
- (14) 前掲書, 16 P.
- (15) レーニン「ナロードニキ主義の経済学的内容」, 全集 1 卷, 大月書店, 449 P.
- (16) 出口勇蔵「ウェーバーは社会科学の方法を前進させたか」, 「科学と思想」No. 2, 新日本出版社, 14 P.
- (17) 大河内一男「独逸社会政策思想史」, 林直道「マックス・ウェーバーの思想体系」等を参照。
- (18) レーニン「『人民の友』とはなにか」, 全集 1 卷, 133 P.
- (19) ウェーバー, 前掲書, 37 P.
- (20) 前掲書, 20 P. (21) 前掲書, 44 P.
- (22) 前掲書, 55 P.
- (23) 前掲書, 51 P.
- (24) 前掲書, 55 P.
- (25) 前掲書, 62 P.
- (26) ウェーバー「社会学の基礎概念」, 前掲書, 105 P.
- (27) 前掲書, 85 P.
- (28) マルクス・エンゲルス「ドイツ・イデオロギー」, 全集 3 卷, 21 P.
- (29) ウェーバー, 前掲書, 85 P.
- (30) エンゲルス「ルートヴィヒ・フォイエールバッハとドイツの古典哲学の終結」, 全集 21 卷, 302 P.
- (31) ウェーバー, 前掲書, 119 P.
- (32) 前掲書, 115 P.
- (33) 本田喜代治「社会学史入門」, 217 P.

さて, ウェーバーによれば, 資本主義社会とは, プロテスタンティズムの禁欲倫理に由来する「近代資本主義の精神」を動機とする「『資本主義的』経済行為……つまり平和的な営利チャンスにもとづく行為<sup>(1)</sup>」によって形成・確立され, 「そしてこの驚嘆に値する発展」の結果, 「精神のない専門家, 愛情のない享楽人, これら無益なものを生産しつつも, 「将来もなお<sup>(2)</sup>」, 存続しつづけるとされる。しかし, 現実の歴史は, ウェーバーの論理と予想に反して進行し, 本質的には共に, 帝国主義相互間での世界市場の分割のための二度の世界大戦の結果, 資本主義の単独支配体制は崩壊し, 社会主義世界体制が確立していった。これによって資本主義はその世界市場を狭隘化したのみではない。その内部における労働者階級の力量の増大と, それによる体制変革運動の激化, あるいはそれまでの植民地諸国における民族解放運動の高まりと, それによる相次ぐ独立とによって, その「高度成長」は終り, 所謂「資本主義の全般的危機」はますます拡大・深化してきているのである。

戦後世界史のこうした法則的な発展過程を、ブルジョアジーの立場から、したがって基本的には、体制的な危機意識に立って反映しているのが、次のパーソンズ社会学なのである。しかし、われわれはここでは、ミルズにならって、「われわれの経験をはっきりさせることにもならないような概念操作を勝手にしかも際限なくつみ重ね<sup>(3)</sup>」ている。この「誇大理論」にたいしては、可能な限りそのあらずじに「翻訳」し、それをみることから始めたい。

さて、パーソンズ社会学の根本的な問題意識は、われわれがこれまでにみてきたような、ブルジョア社会学における方法論の問題、すなわち有機体論的な発想と自然法論的な発想、パーソンズ自身の表現では、「『心理決定論』と『文化決定論』のあいだをゆれ動く不安定な傾向といった問題<sup>(4)</sup>」にたいして、彼なりの解決を与えようというものである。「欲求の論理」と「構造の論理」との統一的解釈ということが、その「約50%が言葉の羅列」(ミルズ)にすぎないといわれる、彼の「社会体系論」(1951)の根本問題なのである。そしてまた、この「難題」にむかう彼の方法論は、われわれの意味での客観的存在としての社会を、その実体や本質において認識しようとするものではありえない。それは、「『構造一機能的』な立場<sup>(5)</sup>」または所謂社会学的機能主義といわれる立場であり、要するに社会を、それを構成する諸単位、諸事象の相互依存関係において捉えようとするものである。

したがって、まず問われるものは、社会の構成単位とは何かであるが、パーソンズによれば、その最も要素的なものは、「個人としての行為者にとって、あるいは集合体のばあいならそれを構成する諸個人にとって、動機づけ上の意義を有している、行為者一状況体系における一過程<sup>(6)</sup>」としての「行為」だとされる。こうしてまずは、ウェーバーの場合とまったく同様に、あるいはそれを継承して、あらゆる社会現象一恐慌や戦争、貧困や失業等々のすべてを含む社会現象を、諸個人の行為に還元してとらえるといった個人主義的な行為理論の立場がとられる。

ところで、個人主義的な行為理論のすべては、行為者によって「主観的にもわれた意味」(ウェーバー)や「動機づけ」を問題にしないわけにはいかない。パーソンズの場合、それは、「行為者の欲求充足の達成や欲求剥奪の回避<sup>(7)</sup>」ということであるが、それではいったい、この「欲求」、「欲求性向」、「欲求構造」等々といわれる中身は何であるのかという問題である。言葉の氾濫のわりには、それは極めて常識的である。すなわち、「まず第一に、栄養の摂取や身体的安全のような、個人の生命の生物学的先行要件である……それはついで、パーソナリティの最小限の安定……というより微妙な問題……たとえば感情的支持<sup>(8)</sup>」といったものにすぎないのである。ある種の動物にも相通する生物学的・心理学的な欲求の人間への機械的適用にほかならないのであるが、これによって一方では、人間の欲望や欲求の多様性や豊富性が否定され、他方では、生産と社会の発展につれて、それがより豊かに拡充・発展していくという歴史的側面もまた否定されてくるのである。

いずれにしても個人行為者は、こうした「欲求」を動機にして、彼の行為「状況」のなかにある、「社会的」、「物的」、「文化的」といった「客体」にむかって、しかもそのうちでも特に「社会的客体」—「一人の行為者、もしくは指向の分析のため一単位とみなされる集合体<sup>(9)</sup>」にむかって働きかけていくとされる。人間が生きるための物質的欲望は「物的客体」つまりは自然にたいする生産的実践によってはじめて充足されるのであるが、パーソンズにおいては、まず、この点が軽視もしくは無視されているわけである。そして、こゝでもう一つ注意しておくべきことは、これまた行為理論の特徴の一つであるが、一人の行為者にとっての「社会」の構成単位は、もう一人の行為者もしくは何人かの「集合的行為者<sup>(10)</sup>」にすぎないとされている点である。しかもパーソンズは、このうちでも特に、二人の行為者間の一对一の相互依存、相互行為過程のなかにこそ、「社会」の基本的なモデルがあると断定する。彼の「社会的相互行為の基本的パラダイム<sup>(11)</sup>」という概念がそれである。

この概念によると、まず一人の行為者＝自我は、その欲求充足のためにもう一人の行為者＝他

私の行為を必要とするのであるが、このことは他我にとっても同様である。こうして自我は、彼の社会的客体たる他我に働きかけていくのであるが、これにたいしては当然、他我の方からの「反応」があり、こうした刺戟と反応の過程、つまりは相互行為過程の進行のなかで相互に相手の行為への予測可能性がうまれてき、これによってお互いの行為は、それぞれの役割行為と考えられてくるのである。つまりは双方に「役割期待」意識、双方の行為を規制する共通の「価値基準」がうまれてきたのである。この価値規準への同調行為がなされるとき、いいかえれば、自我と他我との間に役割「期待の相補性<sup>(12)</sup>」が確立するとき、一方では二人の「欲求充足の最適化」がもたらされると同時に、他方では、二人の社会関係が安定的に維持されていくというのである。パラダイム概念によって「社会」と個人の欲求充足とが見事に統合されたわけである。

これにたいしてわれわれは、しかしこゝではもはや、役割期待といった主観的要素が、相も変わらず社会関係や社会の基礎に据えられているという点については触れないでおこう。とはいえ、常識的には一定の説得力をもつ、この概念における「二人の社会創設者<sup>(13)</sup>」の問題については、やはり、一言しておく必要がある。それはすでに一世紀もまえに、エンゲルスによっておこなわれた次のような批判である。すなわち「この二人は、いっさいの現実から、地上に見いだされるあらゆる民族的・経済的・政治的・宗教的諸関係からまったく解放され、どんな性的および個人的特徴もまったくもたない……二つの完全な幽霊<sup>(14)</sup>」であるという指摘である。幽霊「信仰の問題」はすでに、科学的認識の対象から除外されていたのであるが……。

さて、パーソンズの「社会体系論」の問題は、こうした相互行為過程のみではなく、むしろ中心的には、それらを構成要素とするところの「大規模な社会体系」そのものについてである。しかしながら、こうした全体的な社会構造と、二人の抽象的な行為者間の相互行為過程ないしはそうした社会関係とのあいだには、いうまでもなく大変な質的距離がある。つまりは、こうした極小部分をどんなに積み上げていっても、それ自体の論理にもとづいて自己発展する全体社会の構造認識には、到底、達しえないということである。この問題は、行為理論の「難題」そのものであるが、パーソンズによるその解決は、次のような言葉によって一挙にもたらされる。すなわち、対象的には「行為はたった一つで個々ばらばらにおこなわれるのではなく、それは体系に編成されている<sup>(15)</sup>」という言葉であり、したがって方法論的には「使用される一組の記述的範疇は、一対一に対応するその場かぎりのものでもない……具体的な体系のなかで、それが関連する部分や側面のすべてに首尾一貫して適用できる……概念体系なのである<sup>(16)</sup>」という言葉である。こうした無内容な言葉によって、あの距離を一挙に飛翔したパーソンズによる「社会体系とは、複数の個人行為者が、少なくとも物的ないし環境的側面を含む状況においてお互いに相互行為をしていることにほかならない<sup>(17)</sup>」とされる。まえにみた「社会的相互行為の基本的パラダイム」と、まったくの同義であるが、変ってきた点といえば、まずはこうした社会体系における個人行為者の位置づけである。つまりパラダイム概念においては、彼は社会的相互行為つまりは「社会」の「創起者<sup>(18)</sup>」にほかならなかったのである。しかしそれがこゝでは逆転し、彼は社会体系のどこかに位置づけられた「地位」をもち、この地位に即した「役割」をはたす「一つの準拠点……一つの重要な単位<sup>(19)</sup>」に純化されてきたという点である。このことの結果、個人行為者は「より大きな行為体系、つまり社会体系の利益に関して、かれが担っている義務を実現するという問題<sup>(20)</sup>」に直面していくのである。

第二の点は、こうした全体的な社会を問題にする限り、その社会の仕組、社会構造に触れざるをえないのであるが、それがこゝにおいて「相互行為の過程にかゝり合っている幾人かの行為者のあいだの関係の構造<sup>(21)</sup>」という形ではっきりと明示されてきた点である。行為者間の中心的な関係は、みてきたように、相互の役割期待であった。この役割期待は相互行為の進行過程のなかで「制

度化」されるとされ、こうして中心的な社会構造とは「制度化されたいくつかの役割統一体の複合である<sup>(22)</sup>」とされるのである。いいかえれば、相互行為過程に参加している諸個人の地位や役割を規定している「関係の制度」が社会体系の基本構造だということのである。

パーソンズは、こうした単純な寄算によって諸個人を規定する全体的な構造概念を抽出したのであるが、次には、この全体的な視点からの構造分析の問題つまりは役割への「人員の配分」と、それに伴う「便益」や「報酬」すなわち「所有物」や経済的・政治的な「権力」や「威信」の「配分問題<sup>(23)</sup>」を問題にしていく。そしてまず、この役割への人員配分の基準としては、生得的な「帰属的地位」と諸個人の能力や努力による「業績的地位」とがあり、これによって配分された役割に応じて、所有物や権力や威信も配分され、したがって社会構造とは、こうした諸要素の上下の配分関係から成る「階位体系<sup>(24)</sup>」にはかならないとされる。なんのことはない、現代資本主義社会の物質的・精神的な不平等秩序をそのままに記述したものにすぎないのである。

資本主義的な社会体系のこうした「秩序の問題」、つまりはその安定化の問題が、みてきたようにパーソンズの基本的な問題であるが、しかしその彼も、この秩序に必然的な、現実にある階級矛盾や階級闘争を完全に無視することはできない。しかし彼によれば、まず階級矛盾とは、結局は自我と他我との間の単なる「役割葛藤」にすぎず、また階級闘争とは、それに原因するフラストレーションによる「逸脱行動」つまりは相互行為過程の均衡攪乱行動にすぎないのである。したがって、そうした行動にたいしては「支持」や「許容」、「制約」やコミュニケーションの統制による「状況操作」といった「社会統制……精神療法<sup>(25)</sup>」が加えられていくにすぎない。

社会の構造的な矛盾と、その階級的な人間主体による積極的な解決活動としての階級闘争とを否定する論理からは、社会の歴史的発展の論理を導きだすことは不可能である。「社会体系の変動の諸過程についての一般理論というものは、現在の知識の状態では不可能である<sup>(26)</sup>」とパーソンズも告白する。しかし、それはともかくとして、彼の根本的な問題意識たる「欲求の論理」＝個人または人間と「構造の論理」＝社会との関係の問題はどのように解決されたかである。しかしその結論は、すでにみてきたように、抽象的な観念論に立脚するブルジョア社会学のいずれにおいても、到底、解決不能といわざるをえないであろう。

## 注

- (1) ウェーバー、「宗教社会学論集への序文」、前掲書、173 p.
- (2) ウェーバー、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」、世界の大思想 23 卷、河出書房、233-4 p.
- (3) W. ミルズ、「社会学的想像力」、鈴木宏訳、紀伊国屋書店、45 p.
- (4) T. パーソンズ、「社会体系論」、佐藤勉訳、現代社会学大系 14、青木書店、20 p.
- (5) 前掲書、25 p.
- (6) 前掲書、10 p.
- (7) 前掲書、10 p.
- (8) 前掲書、35 p.
- (9) 前掲書、10 p.
- (10) 前掲書、146 p.
- (11) 前掲書、58 p.
- (12) 前掲書、251 p.
- (13) エンゲルス、「オイゲン・デューリング氏の科学の変革」、全集 20 卷、100 p.
- (14) 前掲書、102 p.
- (15) パーソンズ、前掲書、13 p.
- (16) 前掲書、26 p.
- (17) 前掲書、11 p.

中江好男：マルクス主義社会学序論(2)

- (18) 前掲書, 32 p.
- (19) 前掲書, 33 p.
- (20) 前掲書, 47 p.
- (21) 前掲書, 32 p.
- (22) 前掲書, 45 p.
- (23) 前掲書, 124 p.
- (24) 前掲書, 140 p.
- (25) 前掲書, 301 p.
- (26) 前掲書, 481 p.

(本学助教授・旭川分校)